

話し手が100人しかいない？ 危機言語の保全に向けたプロジェクトが始まった。

2008年12月7日(土)慶應義塾大学三田キャンパス北ホールで、市民フォーラム<シンポジウム&コンサート>「日本語とその隣人たち—身近な危機言語と文化」が開催された。絶滅寸前の危機言語を守るとともに、もう一度、人と人のあり方を考えてみることを目的としている。普段の我々が感じていない気づきがそこにはたくさんある。

「ことば」を失うことは、
人類全体の損失になる。

ウデヘ語ときいてピンと来る人はまずいないだろう。中国とロシアの国境を流れるアムール川領域に住む人々の言葉だ。2002年現在、ウデヘ語を話す人々は140人にしかいない。現在ではもっと少ないだろう。若い世代はロシア語しか話せない。実はこうした絶滅に瀕している言語がたくさんある。しかも日本のすぐそばに、である。前述のウデヘ語の仲間であるオロチ語や、ネギヤル語、ウイльта語などもみな3ケタの話者しか残っていない。これらはツングース諸語というが、実は日本語とも非常に近い言語で、述語が文の終わりに来るし、修飾語や助詞、助動詞の使い方はきわめて日本語と類似している。



第一部では言語の専門家によるパネルディスカッションが行われた。

「地域語」とも呼ばれるこれらの言語の話者や研究者と一般の市民を結び、その復興や交流を促進しようと活動しているのがNPO法人「地球ことば村・世界言語博物館」だ。「ひとつの言語が消滅するという事は言葉だけではなく、知恵や知識、想像力や歴史、そして生活文化が失われてしまうということになります。人類の多様性という意味から見ればそれは大きな損失です。ですから、話者が残っているうちに復興する必要があるのです」と、同理事長の阿部年晴さんは、活動の目的を語る。

今世界で使われている言語は、5,000から6,000あるが、その多くは地域語だ。21世紀末にはそれが半減するという学者もいる。その言語があるからこそ生まれる文化がある。例えば沖縄民謡だ。独特の音階と母音があるから、情感豊かな音楽が生まれてくるのだ。琉球語が無くなれば、あの音楽も失われるかもしれない。

辛辣な歴史も、明るい未来も
「ことば」の中に息づいている。

同法人ではさまざまな活動を行っているが、2008年12月7日に、慶應義塾大学三田キャンパス北ホールで、『日本語とその隣人たち—身近な危機言語と文化』—ことばの世界遺産—言語の多様性をどう守るか—プロジェクト」が開催された。内容は2部構成で、第1部は言語の専門家によるパネルディスカッション。アイヌ語、琉球語、台湾諸語、ウデヘ語、ニヅフ語などをテーマに、大学教授などの専門家によって講義とディスカッションが行われた。

アイヌ語も危機言語の一つである。差別の歴史もあった。現在でも差別を恐れてアイヌであることを隠す人もいう話もあった。言葉はしばしば差別やいじめの原因になる。言語を画一化しようというのは誤りで、異なる言語を使う隣人たちを受け入れることが真のグローバルゼーションだという発言もあった。また、アイヌ語の復興のためにラジオ講座や教育事業を通じて、復興の兆しもあるという明るい話題もあった。

担当者より



地道な活動に助成いただいたAJOSCに感謝いたします。

NPO法人
「地球ことば村・世界言語博物館」
理事長
阿部年晴さん

私たちの活動は皆さんには馴染みのないものだと思います。ですが、例えば若者が方言をまったく話さなくなったら、きっと日本は味気ないものになりますよね。私たちはそんなこともテーマにしています。今回のイベントで「ことば」を大切にしている仲間が増えました。心より感謝申し上げます。

という明るい話題もあった。

第2部では「アイヌアートプロジェクト」と「浦風(琉球国際大学)」による民族音楽コンサートが行われた。トンコリ、口琴などの伝統楽器にエレキギターのサウンドに思わず会場から手拍子が起きる。一方、創作エイサーサークルの「浦風」は会場を通路までめいっぱい使いながら、歯切れのいい踊りと音楽を披露した。まったく異なる世界観と味わいが会場にあふれていた。こんな素晴らしい文化を失ってはならないと観客の誰もが思ったことだろう。



アイヌの伝統音楽を現代アレンジした「アイヌアートプロジェクト」による演奏



「浦風(琉球国際大学)」による創作エイサー